

《紹介》

「科学革命」とピューリタニズム

— C. ヒル説をめぐる論争 —

浜 林 正 夫

I

クリストファ・ヒルが、「イギリス革命の知的起源」(1965年)で提出したテーゼをめぐる、いま、「Past & Present」誌上で、論争がつづけられている。このヒルの書物の内容とそれをめぐる論争については、すでに松川七郎氏による紹介があり、⁽¹⁾またヒルを批判した最初の論文である H. F. カーニーの論文とこれへのヒルの反批判の要旨も、松浦高嶺氏によって紹介されているが、⁽²⁾論争はそれ以後もつづけられており、思想史的に興味ふかい問題も提起されているので、あらためてややくわしくこの論争の紹介をこころみることも、無意味ではないと思う。

論争の出発点となったヒルのテーゼというのは、ごく簡単にいえば、「全体として、科学者たちの思想はピューリタンや議会派の人々の立場に味方していた」⁽³⁾ということである。このことは、ヒル自身ものべているように、近代自然科学の発達、宗教改革や市民革命や、つまり、要するに近代社会の成立という歴史的な背景をもつものであることの主張であり、D. バナール

(1) 松川七郎、「C. ヒル氏の近著とそれについての論争」(『経済研究』第17巻第1号、1966年1月 59-63ページ)。ヒルのこの書物については、わたくしも書評をこころみだが(『歴史学研究』第307号、1965年12月)、この論争にはふれられなかった。

(2) 『経済学史学会年報』第3号、1965年9月 58-59ページ。

(3) C. Hill, *Intellectual Origins of the English Revolution*, Oxford, 1965, pp. 4-5.

が「歴史における科学」で展開したような立場を、16世紀後半から17世紀前半のイングランドにかんして、もっとこまかく論証しようとしたものであった。

ヒルの論点はかなり多岐にわたっているが、この主張に対するカーニーの批判は、その全般にわたるものではなく、次の4点に示ぼられている。その第1は、グレシャム・カレッジの性格についてであって、ヒルによればこのカレッジは、オックスフォード、ケンブリッジの両大学に対抗する「第3の大学」であり、それは、世俗的であり、商人的あるいは中流階級的であり、ピューリタンのであったとされるのだけれども、カーニーはこれに疑問をなげかける。カーニーによれば、グレシャム・カレッジは、その創立の趣旨からいっても、その講座の内容からいっても、オックスフォードやケンブリッジと異なるどころはなく、またそのスタッフもとくに目立った特徴をしめしていない。たしかにその創立期の中心人物であった H.ブリッグスは有能な人物であったに違いはないが、しかしヒルのように、ブリッグスを「きびしい長老派⁽⁴⁾」というのは誤りであって、「もしブリッグスがピューリタンだったというのなら、オックスフォードやケンブリッジの教師の半分は、ピューリタンということになる⁽⁵⁾」。グレシャム・カレッジは、なんら特殊な性格をもつ大学ではなく、ロンドンの人々へ、「数学や航海術のみでなく、修辞学、神学、法学をもまた」教えるためにつくられた「学外大学 (extramural college)」にすぎず、しかもそれが特殊な性格のものに発展していかないように、二つの古い大学によって、「嚴重に看視されていた」ものであった⁽⁶⁾。

カーニーの第2の論点は、科学の発達における商人や職人の役割である。ヒルはこの時期の自然科学の発達がロンドン商工業者の支持によるものと

(4) *Ibid.*, p. 57.

(5) H. F. Kearney, *Puritanism, Capitalism and the Scientific Revolution. Past & Present*, No. 28, July, 1964, p. 89.

(6) *Cf. Ibid.*, pp. 86-90.

み、またこの両者が宗教的にはピューリタニズムと、政治的には議会主義と結びついていたと主張するのであるが、カーニーはこれに反対し、自然科学の発達に貢献したのは、商人のみではなく地主たちもまたそうであったといい、さらに、商人たちがすべて進歩的であったわけではないとして、ポール・ピンダーやヘンリ・ガーウェーら国王派商人の例をあげ、最後に、当時の自然科学が必ずしもつねに実用的な目的のみに結びついていたわけではない、という3点をあげて、ヒルに論駁を加えている。

カーニーの第3の論点は、ピューリタニズムと自然科学との関連についてであって、ここではまず、自然科学者の大部分がピューリタンであったというヒルの見解に反対し、かれらはピューリタニズムとは「まったく異なった宗教思想の伝統にぞくしており、それは広教主義的 (latitudinarian) あるいは穩健派と名づけられるべきだ⁽⁷⁾」と主張する。さらにヒルが、自然科学の思想をベーコンと結びつけることにもカーニーは反対し、むしろそれはベーコンと結びつくよりも、P. ラムスと結びついているという。このラムスの影響はコメニウス＝ハートリブの線でイギリスへもたらされ、1640年代はじめに“*Invisible College*”という名で知られるグループをつくりだしたが、このグループが、ピューリタンの、實用主義的、実験尊重の立場にたっていたのに対し、1650年代には、これと性格を異にする非ピューリタンの、数学者を中心とするいわゆる「オックスフォード・グループ」が生まれ、このいずれもが、王立協会の先駆という関係にある。したがって、ピューリタニズムと自然科学との関連は、ヒルがいうように単純なものではない、というのがカーニーの主張である。

カーニーの第4の論点は、自然科学と市民革命との関係で、ヒルが自然科学の発達を市民革命における議会派の勝利と結びつけているのに対し、カーニーは、議会派が自然科学に、より好意的であったとはいえない、という批判をなげかけている。

(7) *Ibid.*, p. 95.

以上の4つの論点を提起したのち、カーニーは、以上の批判は主として消極的な意味しかもちえないけれども、積極的な意見としては、自然科学の発達を全ヨーロッパ的なものとみ、ピューリタニズムよりもむしろルネサンスの影響を重視すべきだ、という結論を提出している。

ヒルはこのカーニーの批判に、カーニーの論文と同じ標題で、ただちに反論をくわだてた。そこでヒルは、カーニーがその結論部分で提起した積極的見解、すなわち、自然科学の発達がたんにイギリスのみのことではなく、全ヨーロッパ的な現象であるという主張に、一応同意しながら、しかもなお、自然科学の発達が16、17世紀においてカソリック諸国からプロテスタント諸国へ、その主導権をうつしたのは何故か、を問うている。⁽⁸⁾ ヒルによれば、問題の中心はまさにその点にあるのであって、この問題はもっと一般的にいえば、近代社会成立過程におけるルネサンスと宗教改革の役割の評価という問題につながるであろう。ただ、ヒルはこの問題を提出したにとどまり、ルネサンス・ヒューマニズムの性格と限界を追求していない。わたくしは、この点に実はヒル自身の限界があるような気がするのだが、いずれにしろ、ルネサンスの歴史的な性格を明確に指摘しえない弱さが、ピューリタニズムにかんするヒルの主張の説得力を、同時に弱めているように思われる。

つぎにヒルがとりあげている点は、カーニーのピューリタニズムの概念規定のあいまいさであり、カーニーは、ある場合にはピューリタニズムをセクトと同一視し、ある場合にはカルヴィニズムと同一視し、要するに、自然科学との関連があいまいになるように、ピューリタンという言葉を使いわけている、とヒルは主張する。「AとBとのあいだに関連がないことを主張するために、はじめから関連性を排除するような定義をAに与えておくという安

(8) 松川七郎氏は、前掲論文63ページ、注(9)において、ヒルがこの問題についてカーニーに同意している、とみておられるが、この同意はあくまで一応のものであって、むしろヒルは、自然科学の発達におけるプロテスタント諸国の主導性という問題を提起することにより、カーニーの主張に反駁しているのである。

易な方法⁽⁹⁾」を、カーニーはとっている、とヒルはいうのである。つづいてヒルは、カーニーがあげた諸論点を一つ一つとりあげ、グレシャム・カレッジはたしかにオックスフォードやケンブリッジから派生したものではあるが、ちょうど R. H. トーニーがオックスフォードの出身でありながら労働者教育協会 (W. E. A.) を育てたように、両大学とは別個の性格のものとして育っていったこと、当時の自然科学のパトロンにはもちろん地主もふくまれていたが、当時の自然科学が主として天文、数学、航海術のような実用的な知識に結びついており、したがって商人や職人の利害によりふかく関係していたことをくりかえし強調している。さらに、カーニーが、“Invisible College”と「オックスフォード・グループ」とを区別していることにヒルは疑問をなげかけ、ラムスの影響については、これをペーコンときりはなしえないとみている。

最後にヒルは、カーニーがヒルの主張を「過度の単純化」と非難するのに対し、カーニーの主張を「歴史的ニヒリズム」ときめつける。「『過度な単純化を避けよう』という立場から、歴史を無意味なものよせあつめとみる立場を理論的に正当化し、あるいは暗黙のうちにそういう立場を前提とすることへは、ほんの一步である。こういう歴史的ニヒリズムが、現在流行しようとしており、そのことの社会学的な意味もあきらかである。わたくしは〔歴史的な〕関連を正確にはのべなかつたかも知れない。しかし、社会を全体としてみることは正しく、人々の行動や思想を、まるでそれらがバラバラに孤立した自己完結的なものとして存在したかのように考えるのは誤っているという信念を、わたくしは固執する。⁽¹⁰⁾」

(9) C. Hill, *Puritanism, Capitalism and the Scientific Revolution, Past & Present*, No. 29, December, 1964, p. 91.

(10) *Ibid.*, pp. 96-97.

II

このヒルの反批判にカーニーがさらに反駁をよせる前に、“Past & Present”誌は、この論争への新しい参加者を登場せしめた。それは G. ウィッタリジで、彼女が批判の対象としたのは、同誌27号に掲載されたヒルの「ウィリアム・ハーヴェーと君主制の思想」である。このヒルの論文は、ピュウリタニズムと自然科学との関連にかんするいわば一つの事例研究であって、自然科学者として著名なハーヴェーがステュアート絶対王政の支持者であったのかどうかをあらためて追求し、1628年の「心臓の運動について (De Motu Cordis)」では、国王を身体を中心である心臓にたとえるという解剖学的比喩を用いて君主制を支持していたが、1649年の「血液の循環について (De Circulatione Sanguinis)」や1651年の「動物の生殖について (De Generatione Animalium)」ではこの態度は変化し、共和主義的ないし、「せいぜい人民の同意にもとづく君主制を示唆⁽¹¹⁾」するにいたった、と主張している。こういうヒルのハーヴェー解釈に対し、ウィッタリジは、ハーヴェーの解剖学上の見解がヒルのいうような政治的な意味をふくんでいたかどうかは疑わしいとし、さらにその解剖学上の見解も、1628年と1649年ないし1651年とで基本的な変化はなかった、という。そして最後に、ハーヴェーの政治的立場にかんする「1トンの推測よりも1粒の証拠の方が値うちがある⁽¹²⁾」という、ウィッタリジは、ハーヴェーが共和制下においても君主制支持者としてみられていたことの証拠をいくつかあげている。

“Past & Present”誌の第31号は、「16, 17世紀における科学, 宗教, 社会」という標題のもとに、ヒルのウィッタリジへの反論, カーニーのヒルへの反論, そして新しく T. K. ラブのヒル批判の3論文を掲載した。まずヒル

(11) C. Hill, William Harvey and the Idea of Monarchy, *Past & Present*, No. 27, April, 1964, p. 56.

(12) G. Whitteridge, William Harvey: A Royalist and no Parliamentarian, *Past & Present*, No. 30, April, 1965, p. 109.

のウィッタリジ批判は、次のような内容のものである。第1に、ハーヴェーが君主制を支持しなくなったことは、ただちにかれが議会派となったことを意味するのではなく、先の論文ですでにのべたとおり、「中立的」であろうとしたことを意味し、またハーヴェーが共和制政府に対してしめした不安は、議会派主流ではなく、アナバプティストらの左派に対するものであったこと、第2にハーヴェーの解剖学上の見解はあきらかに変化しており、「1616年と1628年にはハーヴェーはまだ、心臓が血液をあたためると考えていたが、1649年には血液が心臓をあたためると考えていた⁽¹³⁾」、第3に、ハーヴェーが自分の新しい見解を、「共和制下の自由な知的雰囲気」のもとではじめて明確に表明したということこそ、重要なのだ、ということである。ウィッタリジはハーヴェー研究者で、ハーヴェーの著作の編集者であるが、思想史家としてのヒルにとっては、ウィッタリジとは異なり、ハーヴェーの学説がどういう状況において公表され、どういう階層によって受け入れられたのか、が問題である、とヒルはいう。「ハーヴェーの崇拜者は、はじめ多くは宗教的・政治的な急進派であり⁽¹⁵⁾」、またかれの主張は、絶対王政下におけるよりもむしろ共和制下において、より容易に展開しえたのだ、とヒルは強調している。最後にヒルは、解剖学の比喩に政治的意味をもたせることへのウィッタリジの疑問に答え、ホップズやハリントンもまた、ハーヴェーにならって血液の循環の比喩を用い、それによってブルジョア社会の原理を表明していることに、注意を喚起している⁽¹⁶⁾。

“Past & Present” の同じ号にのせられているカーニーのヒル批判は、ピ

(13) C. Hill, William Harvey (No Parliamentarian, No Heretic) and the Idea of Monarchy, *Past & Present*, No. 31, July, 1965, p. 98.

(14) G. Whitteridge ed., *The Anatomical Lectures of William Harvey*, Edinburgh, 1964.

(15) C. Hill, op. cit., *Past & Present*, No. 31, p. 100.

(16) この論文の最後にヒルは、「論理的一貫性では他に比べるものがないホップズの場合には、比喩から推論することはこっけいであろう。しかし、ホップズの場合についてはどうであろうか」(p. 103)と書いているが、このあとの方のホップズは、ハーヴェーの間違いではないだろうか。

ユウリタニズムの概念規定，自然科学の実用性，自然科学の国際性の3点にわたるものである。ヒルによって，そのピュウリタニズムの概念規定のあいまいさを批判されたカーニーは，そもそもピュウリタンとはあいまいな用語ではなかったのかと逆襲し，もしピュウリタニズムを定義しようとするなら，「1560年代以降，国教会の内外に生じてきた不満⁽¹⁷⁾」とでもいうよりほかはないといい，逆にヒルの定義（分離派をピュウリタンにふくめない⁽¹⁸⁾）を，あまりに狭すぎると批判している。しかし問題は定義の広い狭いにあるのではない。カーニーがいたいことは，ヒルの定義がはじめからヒルの結論に有利にくみたてられているということであって，これは「同義反覆」にほかならない。「ピュウリタニズムと科学は，同じようなやり方で狭く定義されているから，同じような動きのものとみられることとなる⁽¹⁹⁾」。両方ともに，勤労中産階級の要求に適合的だというヒルの主張は，両方をそのようなものと狭く限定し，またそれにあう史実だけをえらびだして裏づけられたものすぎない，とカーニーはいうのである。自然科学は，ヒルがいうように実用的なものにとどまらず，知的探究に結びついていた，というのがカーニーの第2論点であり，イギリス以外の国々における自然科学の発達（メルサンヌ，ケプラー，コペルニクス，ガリレオ，トリチェリ，マルピーギ）を指摘してその国際性をかさねて強調し，他方，ユグノーやジャンセニズムが自然科学と結びつかなかったことを指摘して，自然科学とプロテスタンティズムとの関連をたちきろうとするのが，カーニーの第3論点である。最後にカーニーは，ヒルの命題を拒否することが，どうして歴史的ニヒリズムなのか理解に苦しむ，といって，この反批判を結んでいる。

“Past & Present”の第31号は，この論争にもう1人の新しい論客を登場

(17) H. F. Kearney, *Puritanism and Science: Problems of Definition, Past & Present*, No. 31, p. 105.

(18) Cf. C. Hill, *Puritanism, Capitalism and the Scientific Revolution, Past & Present*, No. 29, p. 90.

(19) H. F. Kearney, *op. cit.*, p. 109.

せしめた。それは、ヒルによって第29号でカーニーとともに批判された T. K. ラブである。ラブは17世紀の後半以降、近代社会の成立とともに自然科学が発達したことはとうぜんのこととして認めつつ、問題はそれ以前にあるという。1640年以前において、はたしてプロテスタンティズムが、カソリズムより以上に自然科学と結びついていたかどうかこそが問題なのである。そしてラブは、まずヒルがよりどころとしている4つの研究が、ヒルの(20) いうほど十分に、プロテスタンティズムと自然科学の発達との関係を、17世紀前半以前にかんして実証しているかどうかを検討し、結論的にこの4つの研究はいずれも、この関係を十分に実証しえなかったとしている。それではヒルはこれらの研究の不十分さを補うような、新しい事実を提起しえたのであろうか。ラブによれば、答えはあきらかに否であって、ヒルの論証は、1640年以前よりもむしろそれ以後にかんしてはるかに具体的であり、また、ベーコンが「最良のプロテスタントの伝統」のうちにあるというヒルの主張も支持しがたい。逆に、ヒルがピューリタニズムと結びつけてその名をあげている科学者たちは、第一級の科学者というよりはむしろ、「たんなる宣伝家、技術者、あるいは才人 (virtuosi)⁽²¹⁾」にすぎない人々であった。そしてラブが強調するのは、カソリックの科学者たちの活動である。自然科学の発達が何故カソリック諸国からプロテスタント諸国へうつされたのか、というヒルの問題提起に、ラブはカーニーに代わって答え、反動宗教改革がカソリック諸国の自然科学を抑えたのは、すでに「科学の革命」が完了した時期であったといい、あるいは、イタリアにおいては、ひきつづいて自然科学の展開

(20) この4つの研究というのは、A. de Candole, *Histoire des Sciences et des Savants depuis deux Siècles*, Geneva, 1873, R. K. Merton, *Technology and Society in Seventeenth Century England*, *Osiris*, iv, 1938, J. Pelseneer, *L'Origine protestant de la Science moderne*, *Lychnos*, Uppsala, 1946-7, S. F. Mason, *The Scientific Revolution and the Protestant Reformation*, *Annals of Science*, ix, 1953.

(21) T. K. Rabb, *Religion and the Rise of Modern Science*, *Past & Present*, No. 31, p. 118.

がみられたとしている。要するにラブの結論は、宗教改革、自然科学の発達、資本主義の成立というような諸変化が、16、17世紀のヨーロッパ社会を変革したことは事実だが、「しかし、3つのかなり新しい革命的な運動が結果的に多くの共通性をもつにいたったからといって、それらが共通の起源をもち、あるいはその確立期に相互に影響しあったということの証拠とはならない」、自然科学の発達においては「宗教は末梢的なことから (a peripheral concern)⁽²²⁾」にすぎなかったのであり、もし相互の影響関係をいうなら、宗教から自然科学というよりも、むしろ自然科学が宗教に与えた影響こそ重視されるべきだ、ということにある。

以上のようなカーニーとラブの批判に対して、ヒルは三たび、反論をよせたが、その論調はかなり控え目となり、弁明的となった。すなわち、カーニーやラブが、16、17世紀の科学革命そのものに関心をよせているのに対し、ヒルは科学革命そのものではなく、16世紀イギリスにおける「政治的知的革命の起源」⁽²³⁾に関心があるのだといい、「科学思想の普及にとっては、反動宗教改革以後のローマ・カソリックの環境よりも、プロテスタントの環境の方が、より有利であった」ということ、「イングランドでは、多くのローマ・カソリック諸国よりも、科学に対する民衆の関心がつよく、科学の理解がひろまっていた」⁽²⁴⁾ということを、いいたかっただけだ、としている。それ以外の点、たとえば、当時の自然科学が実用的な目的に結びついたものであったかどうか、ベーコンをプロテスタントの系譜のなかで考えてよいかどうか、反動宗教改革による科学の抑圧をいつごろからはじまったとみるか、ピューリタニズムと自然科学との関連は、エートスの問題としても考えるかどうか、というような問題については、ヒルはいぜんとして自説をまげず、ラブとの意見の対立の判定は、読者にゆだねたいとのべている。

(22) *Ibid.*, pp. 125–126.

(23) C. Hill, Science, Religion and Society in the sixteenth and seventeenth centuries, *Past & Present*, No. 32, December, 1965, p. 111.

(24) *Ibid.*, p. 111.

Ⅲ

以上が、“Past & Present”誌の第28号から第32号におよぶ論争のあらましである。論点の多くは、結着のつかぬままに残された感があり、ヒルとその批判者たちの主張は平行線をえがいたままといわなければならない。そしてそれらの論点のいくつかについては、わたくしも十分な判断を下しえないのであるが、しかしこの論争をつうじてうかび上ってくる最大の問題は、やはりピューリタニズムとヒューマニズムの問題であろう。ヒルに対する批判者たちに共通していることは、プロテスタンティズムよりもむしろルネサンスのヒューマニズムが自然科学の発達に対して与えた影響を重要視することであり、そしてその点にかんしてはヒルもかなり譲歩しているようである。しかし、ヒルの批判者たちはもちろんのこと、ヒル自身さえ、ルネサンス・ヒューマニズムと、したがってそれが自然科学に与えた影響とが、一定の限界をもつものであったことに気づいていない。その点では、ヒルが第29号でカーニーにあびせた反批判、すなわち、自然科学の発達が何故プロテスタント諸国へその主導権をうつしたのか、という問題が、もっとふかく追求せられるべきであったように思われる。この問題に対して、ラブが、カソリック諸国にも自然科学者がいたと答え、そしてヒルもこの答えを認める、というような形で、ほりさげがおこなわれなかったところに、この論争のゆきづまりが生じたといわなければならない。その点では、ヒルがヒューマニズム批判を追求しえない弱点をもっていることが責められるべきであろう。

他方、ヒルのピューリタニズム解釈にも無理があったといえる。ヒルは、「イギリス革命の知的起源」のなかで、プロテスタント神学における自然的知識と超自然的知識とのきびしい区別が、自然認識の独立性への路をひらいた、⁽²⁵⁾ といいい、また、カルヴァン自身もそうであったように、ピューリタニズムは経験と効用を重んじ、それがベーコン的なプラグマティズムにつうず

(25) Cf. C. Hill, *Intellectual Origins*, p. 25.

⁽²⁶⁾る、とするのだけれども、この解釈はきわめて一面的であって、ピューリタニズムと自然科学との対立的な側面が、意識的にか無意識的にか、見落されているといわなければならない。ベーコン解釈についても、同じように、ベーコンの反ピューリタンの側面が無視されているのである。したがって、カーニーやラブから、すでにのべたような批判をうけることになったのであって、ヒルはこれに十分な答えを与えることはできなかったのである。17世紀イギリスにかぎっていえば、自然科学者たちは、たしかにカーニーのいうように、ピューリタニズムとは異なった広教主義の伝統のなかにたっている。ヒルの図式では、この関係は説明しきれないであろう。しかしこのことは、ヒルの図式がまったく誤りで、カーニーのヒル批判が全面的に正しいということ、決して意味するものではない。自然科学者は、ヒルがウィリアム・ハーヴェーについて指摘したように、革命には中立的であることが多かった。そのかぎり、かれらとピューリタンとのあいだには、政治的にも思想的にも、距離があることは認めなければならない。しかしそれにもかかわらず、ピューリタニズムによる革命の勝利を、自然科学は歓迎し、またそれによって自然科学の発達の社会的な条件が生まれたことも事実である。そしてその時点では、ピューリタニズムは思想的な勢力としては解体する。こういう両者の関係を、ヒルの図式は正しくとらええず、カーニーの批判もまた、ヒルの不十分さを正しく補なうものではなかった。ウィリアム・ハーヴェーにかんする論文のなかで、ヒルが、「科学の発達にとって重要なことは、プロテスタントの教義（これもいくらかは貢献したかも知れないが）であるよりはむしろ、僧侶の独占的統制の破壊であつた⁽²⁷⁾」と書いたのは、疑いもなく正しかった。この関係を、「イギリス革命の知的起源」において、自然科学とピューリタニズムの思想的親近性にまで高め、その側面がすべてであるか

(26) Cf. *Ibid.*, pp. 92-94.

(27) C. Hill, William Harvey and the Idea of Monarchy, *Past & Present*, No. 27. pp. 71-72.

のように強調したところに、ヒルの「勇み足」があったといってよいであろう。この「勇み足」に対する批判は、カーニーやラブなどとは異なった立場から提起されるべきではなかろうか。